

「日々の理科」(第2072号) 2020,-3,12

## 「チンゲンサイの菜の花(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

チンゲンサイ(青梗菜)は、昭和40年代の日中国交正常化の頃に、日本でも栽培が始まったとされる。通常は葉だけを食用とし、中華料理の炒め物に使われることが多いので、「正体」を知らない人が多い。



和名はタイサイ(体菜)といい、アブラナ科の植物である。確かに花穂のつぼみは、アブラナに似ている。



私は料理の残りを、試しにコップの水にさして、翌日まで置いて観察してみることにした。



翌朝、楽しみにチンゲンサイを見ると、ややや!つぼみが黄色くふくらんでいる。これは咲くかも知れない!私はコップを窓際の明るい場所に置いてみた。



2時間ほどすると、最初の花が開いてきた。八百屋さんで買ってきた野菜に花が咲くというのは、なかなか面白い。野菜の新たな教材の可能性と言える。



花というのは、意外にも花弁が開く速度が速い。月見草など、じっと見ていると、ポカッと開くことがある。チンゲンサイの花も、見るたびにどんどん開いていくのがわかる。中心に雌しべが一本、周囲に雄しべが4本、よく見ると下のほうにもう2本の雄しべがある。花弁は4枚、確かにアブラナ科の花の特徴である。